
不思議の国のありす

麻亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国のありす

【Nコード】

N6465E

【作者名】

麻亜

【あらすじ】

わたしの名前はありません。頭が悪くて運動もできなくて、おまけに泣き虫。そんなわたしがある日、不思議の国のトラブルに巻き込まれてしまい…

1 ありすといじめっ子達

わたしはありす。小学生5年生です。パパとママは天国にいて、高校生のお姉ちゃんと助け合って暮らしています。

わたしは、勉強も運動も苦手。そのことでよくいじめられています。

今日、算数のテストが返されました。ここだけの話、わたしの得点は30点でした。

この数字にいまさら落ち込むことはないけれど、このことでいじめられるのはやっぱりいや。「またいじめられるのかな」って考えると、すごく憂鬱な気分になります。

だから今日は、学校が終わったと同時に、誰にも見つからないように学校を出ました。

「ちょっと！ありす！」

「うわっ！？」

なに！？まさか、この声は…！？

「あんた、またテストで30点取ったでしょ！あのテスト、そんなに難しかった？」

「全然ですよ！僕、あのテストで90点取っちゃいました！ありす君の3倍です！」

思ったとおり、いつもいじめてくるクラスメイトたちでした。最初に私に絡んできたのは通称わる子。そして合いの手を入れているのは、わる子のコシギンチャクで通称インテリ。

「俺、10点だった…へへっ」

わたしよりもおバカなこの子は通称チヨロ介。インテリと同じでわる子のコシギンチャク。

チヨロ介の言葉に、わる子とインテリがうんざりしてチヨロ介をにらみました。

仲間割れ?…なら、今日こそは勝てるかもしれない。

「わたしより低いわ…」

「な、何よ!なんか文句あんの!?!」

わる子の殺気が一瞬で伝わってきました。

「…とくに、ないです…」

なんでこれくらいで泣きそうになっちゃうのかな…泣きたくならないのに。

「まっ、僕にしてみれば『どんぐりの背比べ』ですよ。ありす君!」
イヤミつたらしくインテリが付け足してくる。…泣くな。絶対に泣くな。

「そうよ!悔しかったら追いついてみなさいよ!…行こ!」
わる子たちは走って行ってしまいました。

その場に残っていたチヨロ介が、最後に言いました。
「のろまだから、追いつけないと思うけど…へへっ」
そしてチヨロ介も行ってしまうました。

チヨロ介の言うとおりのろまなわたしが3人に追いつけるはずもなく、涙がぼろぼろと出るばかりでした。

2 ありすのおうちにて

泣きながらのろのろ歩いて、わたしはようやく家に着きました。

「ただいま……」

ドアを開けると、制服にエプロンという格好で、お姉ちゃんが掃除をしていました。

「おかえり、ありす！……って、またいじめられたの？」

お姉ちゃんはいつでも明るくて気が利いて優しい。

「うん……どうしていじめられるんだろう……親がいないから？」

そんなの関係ないって、本当は分かってるよ。でも時々、こうやってお姉ちゃんを困らせるようなことを言っちゃうんだ。

「親がいないことは関係ないわ！」

わたしがただ甘えているだけだって分かっているのでしょうか。お姉ちゃんは私の言うことに決してへこたれることはありません。この強さが、私にもあつたらいいのに……。

「あー！私、バイトの時間だ！ごめんね！！ご飯、先に食べててね！行ってきます！」

落ち込んでいるわたしに気を使いながらも、お姉ちゃんは嵐のように家を出て行ってしまいました。

お姉ちゃんの抜けがらみたいに脱ぎ捨てられたエプロンだけが私の目の前に残っていました。

誰もいない家。もう慣れたけど。

私は重たいランドセルを下ろしました。

「すみませーん！開けてくださーい！！」

ランドセルを下ろして一息つく間もなく、誰かが玄関のドアをど
んとたたたく音が聞こえました。

「はい、今開けます！」

このときはまだ、これから起こる不思議な出来事なんて想像もし
ませんでした。

3 不思議の国へ

わたしが玄関のドアを開けると、うさぎのコスプレをした、中学生くらいの男の人が立っていました。

最近学校でよく先生が言ってる「ふしん者」ってやつ…？

「あの…あなた、誰ですか？」

すぐにドアを閉めて鍵をかければよかったのですが、わたしは怖くなってしまつて、すぐにドアを閉められませんでした。

「何言ってるんですか！！姫様！！早く帰りましょう！！」

どうしよう…この人、頭おかしいよ…。麻薬やってる人なのかな…。

「なんなんですか？あなた…変なコスプレ」

わたしの声はひっくり返っていました。やっぱり、お姉ちゃんのようにはできません。

「ふざけるのもいい加減にしてください！！…まったく…長老様が心配なさっておりますよ！！」

ふざけてるのはどっちよ…。どうしたらいいの…？

「なんでわたし怒られてるの？怖いよう…お姉ちゃん…」

さっきまで泣いていたのに、どこに涙が残っていたのでしょうか。わたしの目からまた涙がこぼれてきました。

「泣いても無駄です！！こうなったら仕方ない…えいっ！」

その人はステッキのようなものを私に向かって振りました。

「きゃあ！！！！」

私の足が浮いて、ジェットコースターに乗ったかのような速さで移動しているのがわかりました。でも怖くて目を開けることはできませんでした。

しばらくして、ようやく地面に足がつかしました。でも衝撃が強す

ぎて、わたしは派手に転んでしまいました。

目を開けると、うつそうとした森の中でした。見たことのない花が咲いていて、きれいな色の小鳥が飛んでいました。

「いたた…ここはどこ？」

「まったく…どこまでとぼけるつもりですか？ここはあなたが住んでる不思議の国ですよ！！……………あれ？あなた誰ですか？」

「…え？」

4 変身

あなた誰ですか？って、こっちが聞きたいです。

「…わたし、ありすって言いますけど…」

「なんだって！？申し訳ありません！私、人違いをしたみたいですよ！どうりで話が通じないわけだ！あはは」

どうやら、怖い人ではなさそうだというのが分かりました。でも、怖い思いをしてこんなところに連れてこられて、私はいやな気分になりました。

「笑ってないで、わたしを家に帰してください！」

「そうですね…ではこちらへ…」

よかった。これで家に帰れる…とわたしが思ったときでした。

「あ、ちょっと待った！これも何かの縁…ありさん！私と一緒に姫様を探してくれませんか？」

その人の突然のお願いには、無理がありました。お姉ちゃんがない間の留守番はわたしの仕事です。それに、お姉ちゃんが家に帰ってきたときにわたしがいなかったらきつと心配します。

「えー？？お姉ちゃんが心配するから、早く帰りたいんですけど…」

「そこをなんとかお願いします！！私、この不思議の国で、長老様と姫様のお世話をしております、宇佐美と言います！！ありさん、私と一緒に姫様を探してください！！お願いします！！」

宇佐美さんの必死なお願いを断るのはちょっと残酷のような気がしました。でも、泣き虫で頭が悪くてのろまなわたしに手伝えることなんて、きつとない…。

「宇佐美さん、ごめんなさい。わたしじゃ役に立てないわ…」

「結構頑固な方ですね…ならばこうだ！えいっ！」

宇佐美さんは、またステッキのようなものを私に向かって振りましました。でも今度はどこに移動するわけでもなく、何にも変化しなかったように思いました。

「宇佐美さん…一体何を…」

宇佐美さんがポケットから手鏡を差し出してくれました。

鏡に映った自分を見て、私は驚きました。私の顔が、わる子そっくりに変わっていたのです！

「なんで私の顔がわる子みたいになってるの！？…こんなのいやあ…！」

「ありすさん、元に戻してほしいなら、姫様を探してください！」

得意げな宇佐美さんを見て、ちよつと悔しい気持ちでしたが、わる子の顔のままで一生過ごすのは絶対にいやでした。

「分かりました…探します…」

「ありがとうございます…！」

「宇佐美…！！大変じゃあ…！！」

わたしたちの元に、大きな荷物と杖を持ったおじいさんがものすごい速さで走ってきました。

5 森へ

「長老様！―安静にしていなければダメじゃないですか！―」

この人が、さっき宇佐美さんが言っていた長老様が…。

ものすごい勢いで走ってきたから気づかなかったけれど、よく見れば、長老様はもうよぼよぼのおじいちゃんでした。

一体どこからさっきのように走れるパワーが出てくるんだろう…。

「わしのことはどうでもいいんじゃない！―それより、姫が…姫が…盗賊にさらわれたのじゃ！―」

「なんですって！？」

「詳しくは、この手紙に書かれておる…」

長老様が差し出した手紙を宇佐美さんと一緒に読みました。

「お前の孫は預かった。返してほしければ城中のお宝をもって。森まで来い。期限は今日の日の入りだ。もし来なければ、姫の命はない…！！？」

わたしと宇佐美さんは顔を見合わせました。

「宇佐美、この手紙の通りに森へ行くのじゃ！―」

長老様は持つてきた大きな荷物を宇佐美さんに渡しました。

「それが、この城の宝じゃ…頼んだぞ」

「は、はい…」

宇佐美さんは怯えていました。

何よ、さっきまでの強気はどこに行っちゃったのよ…！

「大丈夫よ宇佐美さん！私も一緒に行きますから！―」

その言葉に驚いたのは、宇佐美さんじゃなくて長老様の方でした。

「そなたは…人間界の方かのう…」

「はい！ありすって言います！」

「わざわざありがとう。この年寄りの代わりに、わしの可愛い孫を助けておくれ」

長老様は、優しくそうな人でした。

この人を助けてあげたい…。

「分かりました！行ってきます！！！」

6 ありすの決意

さっきまでいた所も十分「森」だと思っていたのですが、そこからさらに奥に進むと、うつそうとした、気味の悪い森に入りました。

「やつらが言う森は、たぶんもう少し行った所です！…もあゝ…どうしたんですか？」

長老様と別れる前は自信満々で宇佐美さんをリードしていたのに、今になってわたしは、宇佐美さんに遅れをとるようになっていました。

わたしは歩きながらずっと考えていました。

宇佐美さんはきつとわたしのこと、頼れる人だっと思ってる。わたしがバカでのろまだってこと知らないんだもん。…本当のこと、話した方がいいよね…きつと。

わたしは決心して、宇佐美さんに本当のことを話すことにしました。

「宇佐美さん」

「…？」

「…わたし、本当は泣き虫で弱くてなんにもできない人間なんです！…いつもいつも、いじめられてばかりで…！」

涙があふれました。

宇佐美さんはなんて言うだろう…何と言われても、後悔はしないようにしよう…！

宇佐美さんはあわてずに、はっきりとわたしに言いました。

「そんなことないですよ！！あなたがいなければ、私は怖くてここまで来られなかった…さあ、もうちょっとです！行きましよう…！」
そして宇佐美さんはまたずんずんと歩きだしました。

本当にわたしでも役に立てるのかなあ……お姫様を助けるなんて自信ないよ。でも……わたし、強くなりたい……！

…決めた！わたし、やってみる！！

わたしは宇佐美さんの後を追いかけてました。

7 姫と盗賊たち

「ねえアネキ、本当にあいつら、来るんですかあ？」

「来るに決まってるでしょ！この娘は、この国の大事な大事なお姫様なのよ？」

私の正体がばれている…。

あいつらって誰なのだろう…？どうかおじい様ではありませんように。

「ふん…ねえ、なんであんな所をうろついていたの？」

近寄らないで！汚らしい！！

「…ふんっ！」

「可愛くないな…」

お城を飛び出したりしなければ、こんなことにはならなかった…。でも、お城を出る以外に方法がなかったのよ……。

あの時、私はお城を飛び出して、とにかく逃げていました。お城からできるだけ遠くに行きたかったのです。

気づいたらこの森に迷い込んでいました。

「お城から出てきたのはいいいけれど…ここはどこ？」

おろおろしていたら、二人組の子分の方が私にぶつかってきました。

「すみません…」

私はすぐに謝りました。でも…。

「いったあーい！！どこ見て歩いてんのよ！！！」

「ちよつとあんた、こっちに来てもらおうか！！！」

あの時、この人たちを相手にしないで逃げていればよかった…。私の頭の中で、いろいろな後悔が浮かんで消えていきます。

「ねえ、面白いこと教えてあげよつかあ」

子分が私に言いました。

「何…」

「あんた、たまたまうちらにぶつかってこんなことになったと思ってるでしょ。…でもね、本当はうちらがわざとぶつかって、言いがかりをつけたんだよ」

そう言っ子分は高笑いをしました。

「なぜそのようなことを…」

「アタシがね、あんたの正体を知っていたからさ！」

アネキと呼ばれている人が言いました。

「あんた、お姫様でしょ…それでね、あんたを人質にして長老のジイを脅せば、お宝が手に入ると思ったのさ」

私は唇をかみ締めました。

私のせいで、もうお体の自由が利かないおじい様に苦勞をかけてしまっている…。

「まんまとだまされちゃって…世間のことも何も知らないのね。バカ！」

そう言っ子分は私を笑いました。

「ちょっと、来たわよ！」

誰が来たのだろう…：どうかおじい様ではありませんように。

8 姫を助ける！

わたしと宇佐美さんは、どうにか日の入りの前に盗賊たちのいる所へたどり着きました。

盗賊と聞いて、わたしは、マッチョな男の人が10人以上いるものだと思ってびくびくしていましたが、どうやら女の人が二人いるだけのようでした。

でも、十分怖い…まるでわる子が二人いるかのようでした。

「あーら、あんたたちがあのジジイの家来かしら！」

「ジジイとは何ですか！あなたたちが、姫様をさらったのですね！」

宇佐美さんが盗賊と言い争っていると、どこから声がしました。

「宇佐美！！」

「あつ！姫様！！」

声のした方を見ると、きれいな服を来た女の人がありました。手首には手錠のようなものがはめられています。

盗賊たちはお姫様と宇佐美さんの間に立ちはだかりました。

「あんたの言うとおり、この娘をさらったのはアタシたちよ！！」

「あんたたち、約束のモノは持つてきたんでしょね！！」

宝物の入った重たい包みを抱えていたのはわたしでした。

やれるのはわたししかない…！！

「ええ…これがお城の宝物よ！！受け取りなさい！！」

怖い気持ちを振り払うように、わたしはお城の宝物をやみくもに振り回しました。

始めのうちは盗賊が宝物を奪おうとしているのが分かりましたが、だんだん盗賊の気配が消えていきました。

気づいたときには、盗賊たちはかなり弱っていました。

「畜生！…おぼえてらっしゃい！！」

「あ、待ってくださいよ、アネキ！！…覚えてらっしゃい！」

盗賊たちは森の奥へ逃げてしまいました。

辺りを見回すと、宇佐美さんとお姫様もいませんでした。どうやら、わたしが宝物を振り回している間にうまく逃げてくれたようです。

しばらくして、やっと普段の自分が戻ってきました。そして改めて自分のしたことに驚きました。

「わたし、すごいかも…盗賊に勝っちゃった！」

9 家出のわけと…

日が暮れていく森を、わたしは恐る恐る歩きました。

宇佐美さんたち、どこまで逃げて行ってしまったのだろう…。

「ありすさん！！ここでーす！！」

声のする方を見ると、宇佐美さんとお姫様がいました。二人とも大きなケガはしていないようです。

わたしが駆け寄ると、お姫様が不思議そうな顔をして宇佐美さんに尋ねました。

「宇佐美、この方は？」

「私と一緒に姫様を助けてくださった、ありすさんです！」

わたしはあわててあいさつをしました。

「はじめまして！あなたがお姫様ですか？」

緊張してしゃべるわたしとは逆に、お姫様は落ち着いていました。

「ええ…ありすさん、助けてくれてありがとうございます」

「いえいえ…」

お姫様に感謝の言葉を言われて、わたしは照れくさくなってしまいました。

そして、一つ疑問がありました。わたしは思い切ってお姫様に聞いてみることにしました。

「お姫様、どうしてこんなことになってしまったんですか？」

少し間をおいて、お姫様は答えてくれました。

「私、聞いてしまったの…おじい様がそろそろ私にお城のあとを継がせたいと話されているのを…おじい様みたいに一人でこの国を治めるなんて、私にはできませんわ！自信がありませんもの！…だからお城から逃げ出しました。…そしたらあの者たちに捕まってしまったのです…」

「姫様は、独りじゃないですよ！」

宇佐美さんが強く言いました。

「私でよければ、いくらでも力になります！…さっ、お城へ帰りましょう！長老様が待っています！」

その言葉に、お姫様は勇気付けられたようでした。

「宇佐美…分かりました。お城へ帰りましょう」

これでめでたしめでたしです。

わたしもそろそろ帰らないと…。

「宇佐美さん、わたし、人間界に帰ります。約束どおり、元に戻してください」

「寂しいなあ…でも仕方ないですね！」

「わたし、宇佐美さんのおかげで強くなれました！ありがとうございます！」

「ええ…！いろいろありがとう」

そう言ってお姫様は、手を差し出してくれました。わたしはお姫様と握手をしました。そして宇佐美さんとも…。

いよいよ別れのときがやってきました。

「ではいきますよ…えいっ！」

「さようなら」

わたしは力いっぱい叫びました。

「ありす！起きて！」

体を揺さぶられて、わたしは目を覚ましました。

「あ、お姉ちゃん…わたし、戻ってきたの？」

「ありす、何言ってるの？」

「ねえ、わたし、わる子みたいな顔してる？」

「ええ！？もう、さっきから何言ってるの！心配なら鏡で見てみれば？…はい」

お姉ちゃんから借りた鏡で自分の顔を見ると、わたしの顔は、もうわる子のような顔ではなく、いつものわたしの顔に戻っていました。

「戻ってる…宇佐美さん、ありがとう！」

10 その後…

あの不思議な出来事の後、わたしは少し強くなったのかもしれない。

「やいありす!!」

「うわっ!」

学校からの帰り道、わたしが一人で歩いていると、後ろから誰かがぶつかってきました。

「今日のバスケ、お前がいなければ勝ったんだよ!」

体育の得意なチヨロ介が言いました。

「理科のテストは33点でしたよね?」

インテリがイヤミつたらしく付け加えました。そして、ボスのわる子かとどめをさします。

「あんた、ほんとになんにもできないのね!」

3人はわたしを取り囲んでニヤニヤと笑いながら、わたしを突き飛ばしあいます。

わたしはインテリに突き飛ばされてチヨロ介の方によるめき、チヨロ介に突き飛ばされてわる子の方によるめき、わる子に突き飛ばされてインテリの方によるめき…。

「なんとか言いなさいよ!黙ってたらかんないでしょ?」

「泣いちゃってるから、もう言い返せないのかなー?」

わたしは、もう負けない!だって、宇佐美さんたちと一緒に強くなったんだから…!!

「あんたたち、いいたいことはそれだけ?」

3人は、わたしが強気に言い返そうとしているので驚いたようで

した。

大丈夫。自信をもって……！

「いつもいつも、しつこいのよ！！もういい加減にして！！」

3人はそろっておろおろしました。たぶんリーダーのわる子が弱気になったら、他の2人はなんにもできないんだとわたしは思いました。

「ありす君が、怒ってしまいましたよ！！……逃げましょう！！」
インテリが情けない声で叫ぶと、3人はものすごい速さで逃げていきました。

追いつけなくても構わない。とりあえず行ってみよう！

「待ちなさあーい！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6465e/>

不思議の国のありす

2010年10月8日15時46分発行